インディアン＝スノー＝デイ

森ゆのか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インディアン＝スノー＝デイ

【Ｎコード】
Ｎ１５７０Ｂ

【作者名】
森ゆのか

【あらすじ】
「インディアン＝スノー（霧）の日には何か特別なことが起こる」そう言った幼なじみの話が心から離れない「ぼく」が霧の日の出逢いをきっかけに様々なことを考えるようになる。切なく透明な夏の日の出来事達。

インディアン＝スノーが空まで積ると、その日は何か特別なことがあるんだよ。

「インディアン＝スノーが、空まで積ると、その日は何か特別な事
があるんだよ。」
ーそう、幼なじみのみいちゃんは言った。
そして、7歳の夏、みいちゃんは死んだ。

インディアン＝スノー＝デイ

あれは、小学校1年生か、2年生の頃だったと思う。
春先の、朝だった。
その日は、すごく濃い霧が街を覆っていた。
通りの反対側の物さえ見えない程で、
耳が、痛くなる程静かだった。
朝の弱い光が、濃い霧に反射して、妙な具合の明るさを作っていた。
まるで、冷めかけた夢の中にいるような感じで、
見なれたはずの街が、なぜかよそよそしく見えた。
「霧がね、このくらい濃くなると、霧っては言わないんだよ。」
学校へ行く道の途中で、みいちゃんが言った。
ぼくとちえちゃんは、みいちゃんを見た。
「インディアン＝スノーって言うんだよ。」

みいちゃんは、いろいろな事を知っていた。
僕らが、見た事も聞いた事もないような話をいつも得意気に話した。
大きくなった今思い返してみると、まるでめちゃくちゃで、何の根
拠もない方なものがほとんどだし、
もちろん、話の中にはその頃のぼくらにもウソだと解るようなもの
も、いくつもあって、「みいちゃんはウソつきだ。」と、みんなで
言ったりしていた。

だけど、ぼくらはいつも、そんな話をわくわくしながら聞いていた気がする。
誰かに聞いた話なのか、自分で作った話なのかは解らないけれど、少なくとも、その話をしている時、みいちゃんにとって、それはいつも紛れもない真実だった。そして、ぼくらにも…。

みいちゃんが話してくれた話の中には、いまだに本当かウソか解らない話や、妙に心に残っている話もいくつかある。「インディアン＝スノー」の話も、そのうちの1つだ。
普段はすっかり忘れていても、霧の濃い日ー濃霧で電車が遅れるような日には、ふと思い出してしまう。
その時の光の具合や、みいちゃんの表情、側の街路樹の感じまで、妙にリアルにありありと浮かんでくるのだ。

「天国の雪はね、こんな感じなんだよ。あるのかないのかわかんないの。
手で触れなくてね。それをね、神様が人間のところに積らせる時は、神様が、誰にも内緒で素敵な仕掛けをする為なんだよ。だから神様が天国に戻ると雪は一気にとけてなくなって、すごくいいお天気になるの。雪が解けると、仕掛けが動き出して、その日は特別な事が起きるんだよ。だから、インディアン＝スノーが空まで積った時は外に出て、神様に仕掛けをしてもらわなきゃなんだよ。」
霧のせいでぺしゃんこに濡れた前髪を何度もかき上げながら、みいちゃんは、ぼくとちえちゃんにそう言った。
みいちゃんの着ていた薄いセーターの毛の先は霧の小さな水滴がたくさんついて、白っぽく光っていた。
その話を聞いた日、特別な事があったかどうかは覚えていないけれどすごくいいお天気になったのは良く覚えている。
そして、7歳の夏休み、ちえちゃんとみいちゃんと3人でプールに行った帰り、

みいちゃんは交通事故で死んだ。

当然の事だけど、その後、ぼくの生活の中にみいちゃんは現れなくなった。
ちえちゃんと、ぼくと、2人が残された。
と、言うより、みいちゃんだけがそこに残されて、ちえちゃんとぼくはどんどん大きくなった。
不思議なことで、みいちゃんが死んでから、2人が大きくなったせいかどうか、
ぼくとちえちゃんは、あまり一緒に遊ばなくなった。
学校の廊下ですれ違っても、お互い気付かないふりをして、目をそらしたりした。
みいちゃんのお墓には年に一度、みいちゃんの命日に母親に連れられて行っていたけれど、
それも中学に入って部活が忙しくなって行かなくなった。

霧の日に

何年かぶりで、ちえちゃんと偶然会ったのは、みいちゃんのお墓のあるお寺だった。
朝、起きて外へ出てみると、ひどい霧だった。
ニュースは繰返して電車の遅れの状況を知らせていた。
ぼくは、しばらくその霧の中に立ちつくして、不意に、本当に急に、みいちゃんの事を思い出した。
いや、正確に言うと、みいちゃんの話してくれた「インディアン＝スノー」の話を思い出したのだ。
「インディアン＝スノーが空まで積ると、その日は何か特別なことがあるんだよ。」
この歳になって、みいちゃんの言葉を信じた訳ではない。
けれど、その日、インディアン＝スノーは空まで積り、ぼくはその中にいた。
「今日は全部サボりだ。」いつも通りのギリギリの時間で、しかも電車の遅れときては間に合うとも思えず、変な理屈に無理矢理納得して、いつも向かう駅とは違う、バス停へ向かった。

どうしてそうしたのか解らない。
サボリと決めたなら他に行く所はどこでも良かったのに。
自分でも、どうしてそんな気持ちになったのか全然解らない。
ぼくはバスと電車を乗り継いで、１時間半程の所にある、みいちゃんのお墓をたずねた。
みいちゃんのお墓を探したが、小さい頃、母親に連れられて何度か来ただけの記憶は、ひどく不確かで、しかもお墓はどれもたいして特徴がある訳でもなく、ぼくは霧の中を歩き回った。
どうにかお参りを済ませて立ち上がると、そこにちえちゃんはいた。

ちえちゃんも、すぐにぼくに気がついた。
でも、ぼくは、それよりもその隣にいるコの方に釘付けになっていた。
「みいちゃん？」
ぼくは、恐る恐るちえちゃんに聞いた。
「やめてよー。」
ちえちゃんは大きな声で言った。
１０数年ぶりで会ったぼくらは、その声の大きさのお陰で「ひさしぶり。」とか「元気？」とか、そんな言葉をすっとばして、一気に幼なじみ同士に戻った。
この時、ぼくはふと、ぼくとちえちゃんのつながりは、そこに誰かもう1人が存在しないと成立しないのかもしれないなと、ぼんやり思った。

ぼくが一瞬みいちゃんかと思った女の子は、霧が晴れ、墓地から離れてみると、みいちゃんとは全然違うコだった。
まあ、最初に見た時も、みいちゃんに似ていると思って間違えた訳ではない。
あの状況で、あの場所で、ちえちゃんと一緒に現われたと言う事実だけが、ぼくに彼女をみいちゃんだと思わせたんだ。
そもそも7歳のみいちゃんが、あのまま成長したら、どんな女の子になったかはぼくにも解らない。
ぼくの記憶の中で、みいちゃんは、あの時の姿のままだ。きちんと切りそろえられた前髪、赤いランドセル…。

そう、記憶を辿っていると、今、目の前にいる2人もやっぱりいつか、みいちゃんがそうであったように突然、ぼくの前から消えてしまうような気がしてしまった。
そして、その不安を隠すようにぼくは、わざとらしくはしゃいだような態度になってしまって、自己嫌悪した。

ぼくは人見知りが裏目に出るのか、どうゆう訳か初対面の人と会った時なんかに、こんな風に不自然に明るくなる時がある。ぼくは自分のそうゆう所があまり好きではなかった。

彼女はちえちゃんの友達で、ちえちゃんは今、ボランティアで、福祉施設へ行っていて、よく子供達にお話をして聞かせているのだと話した。

お話が底を尽きると、みいちゃんのしてくれた話を思い出しては話して聞かせるのだけれど、一生懸命覚えて行ったお話よりも、そっちの方がウケがいいの。と笑った。

それで、お話を使わせてもらっているお礼も兼ねて、たまにこうして、お墓参りに来ているらしい。それが、たまたま、ぼくが何年かぶりで来たのとばったり会ったと言う訳だった。

ぼくらは一通り近況を話し終えると、メロンソーダと紅茶とコーヒーしかメニューのない、墓参りの客相手の喫茶店を出た。

霧はすっかり晴れ、お天気の空が広がっていた。

7月17日

彼女の家はぼくらの住む住宅街の中にあった。
小さな時から転校を繰り返していたという彼女は、ぼくとちえちゃんのような幼なじみはうらやましいといって、ぼくらは良く3人で行動するようになった。ちえちゃんと彼女は元から仲が良かったのだから、そこに幼なじみのぼくが加わったという言い方が本当は正しいのかもしれないけれど、そんなことはどうでも良かった。幼なじみというのは心地良いものだし、ぼくとちえちゃんの場合、そこに彼女がいるのは余計に心地良かった。

梅雨が開けてすぐの朝、駅の構内で彼女を見かけた。
不思議な光景だった。
その駅は、いくつもの路線の接続駅で、朝夕のラッシュ時にはひどい混雑になるので有名な駅だった。
そのラッシュのピークの時間、彼女はその駅の構内を気持ちの良いペースですいすいと歩いていた。
ぼくは、しばらく目が離せないでいた。
人混みの中を、彼女はまるで1人で歩いているようにペースを崩すこともなく、人を避けるでもなく、かといって周りの人が彼女を避けている風でもなく、自在に歩いていたのだ。
まるで魔法でも見ているようだった。
ぼくは、その姿を目で追っている間にも、何人もの人の肩にぶつかり、いつか人の流れに乗っていた。

3人でオレンジジュースを飲んでいる時、彼女にその話をした。
「なんだ。声かけてくれれば良かったのに。」
と、彼女はとても普通な答えをした。
「キラワレてんだ。」

ちえちゃんが笑いながら言った。
「違うよ。」ぼくは慌てて彼女に言ってから、「おまえ、そんなイジワルだったか？昔から。」と、ちえちゃんをにらんだ。
知らなかったの？という風な顔をちえちゃんがして、彼女は笑った。

それ以前にも、確かにいろいろ話はしているはずなのに、どういう訳か、この会話がぼくの記憶の中で、彼女と1番最初に交わした会話になった。
そして、このごく普通の会話と、あの不思議な光景が、うまく噛み合わず、ぼくの中にやわらかなしこりのようなものを残した。
まるで、薄い霧を固めたような、白い、やわらかなしこりだった。

7月31日

氷の入ったオレンジジュースを飲みながら、ぼく達はしゃべったりしながら退屈な日曜日を過ごしていた。
その頃、ぼく達は暇になると、3人の家の誰かの家に集まった。
集まっては、他愛もない話をして過ごした。
その話の他愛のなさと言ったら、本当に、高校の休み時間に、後ろの席の友達とするような、そんな類いの他愛のなさだった。

「何見てんの？」
さっきから、話に入って来ない彼女に気がついて、ちえちゃんが聞いた。
「雲。結構、大きい雲だったんだけど…。」彼女は窓の外を指差した。
「少しずつ、小さくなって…ほら！無くなった。今から快晴だ。」
彼女はまるで、それが自分の手柄のように言った。
ぼくらはしばらく窓から外を見た。
こんな風に空なんか見たの、どれくらいぶりだろう…と、ぼくは考えた。
「あの鳥、雰囲気いいね。」
ちえちゃんの言葉につられてみると、羽根を広げたまま、ゆっくり飛んでいる鳥がいる。確かにいい感じだった。
ぼくはなんだか、すごく穏やかな気持ちになった。
天気のいい日曜の午後、氷の入ったオレンジジュースを飲みながら空を眺める。
きっと老人は縁側で、こういう気分を味わっているのだろうと、しみじみ思ったりした。
「鳥ってさ、」ぼくの平和を打ち壊すように彼女は言った。「私達から見れば空にいるみたいに見えるけど、鳥が上を見ると、きっと

上に空があるんだよね。空って、どこにあるんだろ。」
ぼくは空を見るのをやめて、彼女を見た。
哲学的なことを言っているのか、見たままを素直に言っているのか、
時々彼女は解らない。
彼女は、空を見たまま呟いた。
「消えた雲は、どこへいったんだろ。」

そんな風に、ぼくらの毎日は過ぎて行った。

7月31日

夏に入るとすぐに、盆踊り大会があった。
この辺りでは夏祭りは大抵、夏の始めか、夏の終わりにやる。本当のお盆には、みんな、それぞれの田舎へ帰るからだ。
ぼくは、この夏祭りにも、田舎の夏祭りにも、もう何年も出ていなかった。
夏祭りに3人で行こう、と言い出したのはちえちゃんだった。
もう何年も興味を失っていた夏祭りだったが、久々にそう聞くと、なんだか子供に戻ったように軽い興奮がむくむくっと、お腹の辺りを刺激した。
ぼくとちえちゃんが3日間のうちの、どの日が盛り上がるとかそんな話をしている間中、彼女はやたらはしゃぐぼくらが不思議でならないように、きょとんとした表情で見ていた。

最近ようやく分ってきたのだが、彼女が計画の段階で興味を示す事は、まず、ない。
それは、例えは悪いが、家の中で庭の犬の散歩コースを相談しているような感じなのだ。
彼女は相談の間は、その話とは全く無関係なのだ。
その代わり、散歩に出掛けてしまえば犬が一番楽しんでいるように、彼女が話に加わらなくても、それは彼女が参加したくない訳ではないと言う事は、実際いつでも彼女が本当に犬じゃないのかと言うくらい楽しそうにしている事で充分解る。
それが解るまでには、この「きょとん」には随分と悩まされたが、この頃では彼女は犬だと思いきって、計画はぼくとちえちゃんとで勝手にすすめる事にしていた。
ちえちゃんは、ぼくの最初の頃の困り果てた風を思い出して、「最

近、彼女の扱いがうまくなった。飲み込みが早いよ。」と、笑いを堪えるように言う。
ぼくも内心、これだけうまく彼女と付合ってゆけるのは、ちえちゃんの次の2番目くらいだと思うようになっていた。

そういえば、子供の頃にも、こうして3人で夏祭りに来た事があった。
その時はぼくとちえちゃんと、もう1人はみいちゃんだったけれど…。
でも、その時も結局、行きと帰り以外は、ぼくとちえちゃんは、ほとんど2人だった。
あの時はちえちゃんと、半ば母親にムリヤリ着せられたぼくは、浴衣だった。
1人、いつも通りの姿で現われたみいやんは、きまりが悪かったのだろう、「2人とも、そんなカッコじゃ、あんまり遊べないね。」と言って、1人で公園の鉄棒をしたり、他の子達と鬼ごっこをしたりしていた。

ちえちゃんも、その時の事を思い出しているのだろうか。
ぼくは隣を歩いているちえちゃんを見た。
今日は、ちえちゃんも彼女も浴衣を着ていた。
ぼくだけがジーンズとTシャツだった。

一通り遊び回って、ぼくとちえちゃんを探し出して戻って来た彼女は、パンパンの笑顔だった。
ほてって赤く上気した頬に、鼻の頭にうっすらと汗をかいて満面「笑顔の見本です」というように現われた彼女にぼくもちえちゃんも思わず吹き出してしまった。
「あの顔は、生まれたての赤んぼか、脳ミソ切れた狂人にしか出来ないよなぁ。」

帰り道、ぼくはちえちゃんにこっそり言った。
「うん。うん。」それにはちえちゃんも笑って頷いた。「でもさ、変わってるって言うより、限り無く自然でしょ。だからたまに、このコが普通で、こっちが変なのかな…って思う事があるよ。」
「あ。それ、解る。解る。…でも、座り込まないだろ。普通。」
ぼくは浴衣姿のまま、芝生の土手に座り込んでしまった彼女を指差した。
「何してるの！」
ちえちゃんは呆れて、土手に走って行った。
「星がすごいんだよ。」
彼女があまりに普通に言うので、ぼくもちえちゃんもつられて、そこに座って星を見た。
本当にキレイな星空だった。
ぼくらは星を見ながら、しばらく話をしていた。
昼間とは濃度の違う時間が流れているみたいで、それが長い時間だったのか、ほんの少しの時間だったのかは解らない。
「夜はさ、地球が宇宙に浮かんでるんだなって、実感するよね。昼は雲とか空とかに邪魔されて忘れちゃってるけど。」
彼女が言った。
ぼくの中にその言葉は夜の空気のように、しっとりとしみ込んだ。
「だからかな、昼たくさん語り合うより、夜ちょっとおしゃべりする方が、うんと解りあえる気がする。」
「夜が好きなの？」ちえちゃんが隣の彼女を見た。
「んーん。星が好きなの。」
と、彼女は空を見たままで言った。
ぼくは、宇宙に浮かんでいる自分の姿を考えていた。

8月7日

そんな毎日が限り無く、ぼくの日常になりつつあった。
でも、彼女の非日常的なものを飲み込んだぼくの日常は、どこか消化不良の胃のようで、あの日のインディアン＝スノーが、身体の中にまだ溶けずに積っているような気がして、なんだかすっきりとしなかった。
ぼくが彼女に感じる、この不思議なものは、ぼくだけが感じているのか、それとも本当に彼女が持っているものなのだろうかと考えてみたりした。
ちえちゃんは、彼女の側でどう思っているのだろう…とも。

ある日の事だった。いつものように3人で、他愛もない話をしていて、ちえちゃんがふと、本棚から中学校の卒業アルバムを取り出した。
本当に、ふと、目についたから取り出したと言う感じで、話しながらページをめくった。
ぼくはなんだか嫌な気持ちになった。中学校には、あまりいい思い出がない。
別に、いじめられたとか、そういう訳ではないのに、どういうわけか、ぼくは、ぼくらの中学が嫌いだった。
「オレ、中学嫌い。」
できるだけ、何気なく言ったつもりだったけど、声は明らかに不機嫌だった。
「そうなんだ。」
ちえちゃんはすぐにアルバムを本棚に戻した。
ちえちゃんは、こういう所は実にあっさりとしている。
痛い所はつつかないというか、なんというか…。
ぼくは、ちえちゃんは人とあんまり深く付合った事がないんじゃな

いかと、たまに思う。
「ごめん。中学の頃の自分、好きじゃなくて…。」
あまりあっさり対応されると、ぼくはつい言い訳したくなる。
「解るよ。誰も、自分の事好きな人いないよ。」
ちえちゃんが言った。
何も話さなくていいよ、という風だった。
少し、しんとした。
「私は、自分、好きだよ。」彼女が言った。「私も、自分の嫌なトコはあるけど、そういう、嫌なトコも全部ひっくるめて、私は自分が好きだよ。」
真直ぐな瞳でそう言い切って、彼女は照れくさそうに笑った。悪戯ッ子のような笑顔だった。きれいごととかではなくて、自分を丸ごと好きだと言える人がいる事にぼくは驚いた。
そして、そんな彼女をとても強い人だと思った。

夕方ぼくらは表へ出た。
ぼくらは夕方、陽射しが少し和らいでくると、よく外を歩いた。
「ねえ。」
昼間の火照ったような空気を夜が静かに冷やしてゆく。
近頃、夜は急速に涼しくなっていく。
夕暮れの薄暗がりの中で、ちえちゃんが呼んだ。
「ん？」
半歩程、前を歩いていた彼女はちょっと首を傾げるように振り返った。
「…なんでもない。」
「なぁにー？」
彼女は、くったくなく笑いながら言った。
「なんでもない。」
「ずるい。言いかけたのに。」
「いーの。やめた。」

ちえちゃんが、そう言い切ると、彼女は少しいじけた顔をし、それでも、もう、それ以上はその事に触れずに歩き続けた。
「犬コロみたいだな。」
ぼくがそう言うと、ちえちゃんは応えるように話した。
「あのコにさぁ、ある程度以上近付くと、誰でも好きにならずには居られなくなると思う。小さい女の子みたいに無邪気で、それでいて何にも負けないくらい強くて。全身で生きてるって感じなんだよね。なんか、巻き込まれちゃうの。あのコのパワーみたいなものに触れちゃうと、それが何かも解らないウチに自然に巻き込まれちゃうの。」
「まあ、良くも悪くも、人を惹きつけるトコ、あるね。」
「惹きつけられてるでしょ。」
ドクン。
心臓が鳴った。

「ねえ。」
彼女が振り向いて、ぼくとちえちゃんを呼んだ。
ドクン。
また、心臓が鳴った。
「ちょー、いーい空気だね。冷たさがさ、ちょうどいい。」彼女はかまわず続けた。
「こうやって、歩きたくならない？」
両腕を平泳ぎするように広げて、跳ぶように、彼女は歩いた。
「やめてよねー。恥ずかしい。」
ちえちゃんが笑った。

一自分のいいトコも、嫌なトコも、全部ひっくるめて、私まるごと自分が好きだよ。
昼間、真直ぐな瞳で、そう言い切った彼女を思い出しながら、ぼくも笑った。

8月11日

「でも、あれだよな。自分の事、1番知ってる自分が、自分の事好きになれないのって、自分が可哀想だよな。」
急に言い出したぼくを、ちえちゃんと彼女が驚いたようにみた。
ぼくはコップのオレンジジュースを一息に飲み干して、この何日か考えていた事を話してみた。
「いろいろさ、考えてみようと思ってるんだ。自分の事。性格とか、考え方とか。そしたら、もうちょっと、自分が見えてくるんじゃないかと思ってさ。自分が自信持って好きになれないような人間、他人に好きになってもらおうなんて、ズルイもんな。」
「好きになってもらいたい人がいるんだ？」
ちえちゃんが、意地悪な横ヤリを入れたけれど、ぼくは無視して話を続けた。
「でも、それって結構大変な。もの考えるのって、勉強するよりキツイかもな。」
「無理して考えるからでしょ。」
また、ちえちゃんが意地悪く言った。
「うん。」彼女まで同意した。「頭に浮かんでくる事、素直に考えればいいんじゃない？自分の考えの方向、強制しようとするのって、それが例えいい方向でも、あんまりいい事だと思わない。頭に浮かばない事、無理に引っ張り出すとか、逆に無理にかき消すとかそうゆう事しないで、頭にふって浮かんできたものが、ふって消えるまで自然に考えてれば、それでいいんじゃない？」
ぼくは感心して聞いていたが、
「それって、もの考えてるって言うの？」
と、ちえちゃんは言った。
「ぼーっとしているとも言う。」
彼女は自分でそう言って笑った。

その日は早い時間に、彼女は病院へ行くからと言って帰った。
「病院？」
彼女が帰った後、ぼくがちえちゃんに聞くと、ちえちゃんは彼女にアレルギーがある事を話した。
簡単にその話をしてから、しばらく他愛もない話をしていたが、やがて、ちえちゃんも帰った。
ぼくは、空になったガラスのコップの外側についた無数の水滴をしばらく見ていたけれど、ぼくの頭には、彼女の言うように、ふっと考えが浮かんできたりはしなかった。

クーラーの効かない真夏の午後のけだるい眠りから覚めて、ぼくは、どんな夢を見たのかは、すっかり忘れてしまっていたけれど、夢の気分だけ噛みしめて、これが人生なら、とても悲しい…と、思った。

中学生の頃、ぼくはよく屋根に登ったので、ぼくの部屋の窓の横には今でもハシゴがある。
夜、暗くなってから、ぼくは屋根に登った。
ぼくは、彼女の身体の事を考えていた。アレルギー体質だという。
彼女の身体は、いつも微熱がある。身体がアレルギー反応を起こす為だ。
そういえば、何かが、化学反応する時は熱や光を生じると、昔、化学の授業で習った気がする。
彼女は、この世界に生まれながら、この世界に適応していないのだ。
ぼくはアレルギーという事を、そんなふうに理解した。
人は皆、それぞれに苦手なものや、合わないものがあるけれど、彼女の場合、この世界そのものに、生まれつき合わないんだ。

ぼくがこんな事を考えている間も、彼女の身体は自分に合わない世界に身をよじるように熱を発しているのだろう。

8月12日

相変わらず、良く晴れた日が続いていた。今年の夏は晴れの日が多い。
今の小学生が、ぼくらの頃と同じように、お天気を毎日記録する宿題があるとすれば、今年の彼等は運がいい。例え夏休みの最後の日に、それをまとめてやるハメになっても間違える事無く出来てしまうだろう。
それほど、今年の夏ははれの日が多い。
そして、ぼくらも相変わらず、他愛もない話をし続けていた。

彼女が近くのコンビニエンスストアに買い出しに行っていた。
冷たいオレンジジュースとアイスキャンディーが、僕らには必要だった。
「あのさ」
わずかに風の入る窓に、できるだけ近いところに移動しながらちえちゃんが言った。
「あのコはやめた方がいいよ。彼氏いるから。」
「別に彼女の事なんて、何も言ってないだろ。」
いきなりでカチンときたので、ぼくは不機嫌に言った。
「うん。」
ちえちゃんも素直に黙った。
居心地の良くない沈黙が、部屋の中に雪のように積ってゆくのが見えるようだった。
ぼくの中では、イライラと音をたてて、２つの渦巻きが同時に発生した。
１つは、ちえちゃんへの攻撃的な渦巻き。彼女を好きだなんて、ぼくは１度も言っていないし、彼氏がいるとか知る必要もなかったし、そんな事言われたくもなかった。

そして、この嫌な沈黙から逃れたい。ぼくの機嫌も、ちえちゃんの機嫌も、これ以上損ねる事無く、和やかな雰囲気に戻したいという渦巻き。
2つが急速に大きくなっていくのに、ぼくは絶えられなくて第3の道を選んだ。
「どんな人だよ。会ってみたいなぁ。」
できるだけ、明るい声で言った。
「会わない方がいいよ。」
ちえちゃんは最初の会話に戻すような言い方だった。
「なんで、だから…。」
怒って言うぼくを遮って、ちえちゃんは強引に話を進めようとした。
「会ったら納得しちゃうから。この2人じゃしょうがないやって、辛くなるよ。」
ぼくは、もう口をきかなかった。
「あの2人さ、端で見てるだけでも解るくらい好きあってるの。でもね、なんでか解らないけど、2人見てると悲しくなるの。なんてゆうか…捨て犬みたいなんだよね。小さい段ボールに捨てられて、体くっつけ合って温め合うのが精一杯の仔犬って感じなの。あの2人は離れられないよ。他の誰も、段ボールの仔犬1匹だけを抱き上げる事は出来ないよ。」
話の途中で戻ってきた彼女は、お盆にオレンジジュースを3つ乗せて、立ったままで、その話を聞いていた。
窓から入ってくる風が、レースのカーテンだけを静かに揺らした。
しばらく、部屋の中は、しんとしていた。
沈黙を破ったのは彼女だった。
部屋を満たした沈黙の中を、彼女は宇宙飛行士のように、ゆっくりと歩いて真中のテーブルに、氷の入ったオレンジジュースを3つ置いた。
そして、お盆を持って部屋から出て行き、代わりにアイスキャンディーを3本持って戻ってきた。

たっぷりその間、ぼくとちえちゃんは黙ったままだった。
アイスの袋を開ける音が、いやに耳についた。
やけに甘いアイスだった。
「だから」ちえちゃんが、事態を収集するように言った。
「ダメって解ってる時は、深刻になる前に手を引いた方がいいって事。」
でも、それは逆効果だった。
ここまでくると、彼女がここに居ようが居まいが、ぼくが彼女を好きかどうかとか、そんな事はどうでも良くなっていた。
「おまえ、いつも、そうなんだろ。なんで傷つかないようにするんだよ。」
ちえちゃんは黙っていた。
「傷ついたり、傷つけたりする事で壊れちゃうのが恐いのか？それは、そんな程度の付き合いしかしないからだろ、おまえが。」
彼女もじっと、ぼくは言うのを聞いていた。
「もっとさ、近付いてみろよ。自分を見せなきゃ、相手だって見せてくんないんだぞ。自分をさ、見せる事とか、相手を知る事とか、そうゆう事から逃げるなよ。」
ぼくは、少し落ち着いてきた。
「傷つかないって、裏切られないって、言い切れないけど…、少なくても、オレは裏切ったりしないから。」
しばらく、しんとした。
また、彼女が立ち上がって、部屋を出て行って、濡れた布巾を持って戻ってきた。
ぼくたちは3人とも、融けたアイスで手がベトベトだった。
少し、空気がやわらかくなった。

外が暗くなってくると、ぼくらは近くの公園に行った。
まだ、この時間なら、子供が沢山いるかと思っていたが、予想に反して公園はガランとしていた。

ブランコやウンテイが、昼間の暑さでぐったりしてしまったよと体全体で訴えるように、やっとで立っているように見えた。
「夕べ、ロケットを飛ばす夢を見たよ。」
いきなり突然、彼女がそんな事を行った。
「浜辺にスタンバイしてるロケットは、砂の下に埋まってるところがあるのか、ないのか…。ともかく、見えてる先端は私の背丈くらいもないの。点検してる人が、後ろに立ってる私に、『こりゃあ痛いぞ。ミサイルのお尻にくっついて行くようなもんだ。』って言うの。私はね、ロケットに乗る人ではないんだけど、飛ばす人としては重要らしくて、博士みたいな人の隣にいて、乗り込む人1人1人とキスをするの。」
「うん？」
「それだけ。」
「で、飛んだの？」
ちえちゃんが聞いた。
「さあ。そこまでは見てないよ。ただ、そんな夢を見たってだけ。」
それは、間違いなく会話を続けられるような類いの話ではなかった。でも確かに、喧嘩の後のぎこちない空気は、どこかへ消えていた。

8月14日

その日は朝から雨だった。
ぼくは、ぼーっと外を眺めていた。
それはまるで、何年も読んでいなかった、昔大好きだった本を読み返すような感じだった。
たいして珍しい訳ではないのに、ヘンに新鮮な、あの感じだ。
ぼくは、しばらく中断していた、「自分自身について考えてみる」事を再開しようとしてみた。
それほど、しばらくぶりの雨はぼくを退屈させていた。

そんな時、彼女が、ビーチサンダルとレインコートを着て突然やってきた。
「散歩しない？」
この夏、雨がほとんど降らないせいもあるけれど、ぼくらは雨の日に集まった事はなかった。
学校でしか会った事のないクラスメイトの私服姿を初めて見た時のような、淡い戸惑いがぼくを襲って、彼女のその突拍子もない誘いを理解するのが一瞬遅れた。
…3分後、ぼくは彼女の指示に従って、ビーチサンダルを履き、ビニールの傘をさして、街を歩き出した。

家にはレインコートはなかった。彼女は不服そうだったが、「ちゃんと周りが見える透明な傘」で妥協した。そして、どうせ濡れるからと、ビーチサンダルを履いて、ぼくらは表へ出た。
彼女ははしゃいでいた。
雨が好きなの？と聞くと、しばらく考えて、
「雨が降ってる時の、街の感じが好きなの。」
と、笑った。

確かに、雨の音でうるさいくらいなのに、街は逆にひっそりとした感じで、独特の、寄せつけないような雰囲気だった。
そして、そこに自分も参加してしまうと言う事は、変に心を穏やかにさせ、同時にワクワクさせた。
「ねえねえ、世の中ってさ、最高の芸術だよね。」彼女が植込みの木に寄り掛かるようにしながら、感心したように言った。「葉っぱの1枚1枚まで念入りに作ってあって、３６０度、上も下も、全部どこ見てもだし、動きまであるし、空間の微妙さったら神業だよね。」
「初めてだよ。雨の中、散歩につきあわされるの。」
レインコートが約に立たない顔と手と、膝から下の素足をずぶ濡れにして、彼女は笑った。
何日かぶりの恵みの雨を喜ぶ、木や花の気持ちを代表しているような笑顔だった。

うちつける雨で、バリヤのように煙った、屋根や塀と同じように、雨に打たれる彼女の方や頭や、そんな雨との境目を見ながら、ぼくらは、ほとんど街中を歩いた。
公園にも、プールにも行った。
途中、自動販売機でジュースを買って飲んだ。
「なんか周り中、水なのに、敢えて味のついた水飲んでるのって奇妙な。」
おかしな事を言っているような気がしながらも、ぼくがそう言うと、彼女は「わかる。わかる。」と笑った。

たっぷり、ぼくらは雨の街を堪能して、ぼくの家の前に戻った。
「あがってく？」
ぼくが聞くと、彼女は黙って首を振った。そして、ちょっと困った風な顔をして、そして言った。
「森くんと、別れちゃったよ。」

森くんというのが、ちえちゃんの言っていた彼女の彼だというのは、すぐに解った。
彼女は、通りの雨の方を見た。
「捨て犬はさ、段ボールの中で生きていく訳にはいかないんだよね。良い人に拾われて、あったかな家でかわいがられるのが、きっと幸せなんだよね。拾われてったのを、残された方は喜んであげなきゃいけないよね。」
ちえちゃんの言葉を引用して、まるで本当に犬の話でもするように、それだけ言うと、彼女はくるりと振り向いて、ぼくの方を見て笑った。
何も知らないで見たら、彼女は今、なんて幸せなんだろうと思わせるような笑顔だった。
ぼくは、そんな彼女を本当に逞しいと思った。同時に、人は、どんなに辛い時にも幸せそうに振舞う事は出来るんだと、思い知らされた気がした。
「ごめんね。変な話聞かせて。」
そう言う、彼女の屈託のない笑顔を見ながら、ぼくは胸の所に、重い、鉛の固まりが突っかかったように感じた。そして、それはもう、この先ずっと、取れないでいるのだろうと確信していた。

8月28日

きっかり2週間、彼女はぼくらの前に現れなかった。
その間に、まるで今までの分を取り戻そうとするかのように何度も雨が降った。
雨が降る度に、ぼくはビーチサンダルとビニール傘で街に出てみようかと思ったけれど、結局一人で散歩する事はしなかった。

彼女が「森くん」と別れてしまった事はちえちゃんも知っていた。
「あんな立派な解説をしてもらった直後で、お恥ずかしいのですが…。」と、ふざけたように言っていたと、ちえちゃんはぼくに言った。森くんが、彼女から居なくなる事なんてないと思ってた、とも言った。
ちえちゃんに言わせれば、2人は理想的なカップルだと誰もが思っていたらしい。
彼女と「森くん」の周りに、どんな人たちがいたのか、ぼくは知らないけれど、彼女があんな風な笑顔で笑っていたと言う事だけで、それは充分信じられた。

彼女がいないだけで、ぼくの毎日は、なんだか急に静かになった感じがした。
それは、穏やかと言うのではなくて、退屈で、落ち着かない、ぎこちない静かさだった。
彼女の言葉や行動に、自分がどれだけワクワクしていたかを初めて意識した。
ちえちゃんが家に来たり、ぼくがちえちゃんの所へ行ったりしていたけれど、「こうゆう時は静かにしておいてあげた方がいい。」と言うちえちゃんの言葉に、今度ばかりはぼくも賛成だったので、彼女に連絡したりはしなかった。

それでも、なんだかオレンジジュースの味が薄いような気が、ぼくもちえちゃんもしていた。

そんなふうにして、人生で1番長い2週間が過ぎて、彼女はひょっこり戻ってきた。
2週間、旅行にでも行っていたみたいに、まるで悪びれずに現われて、テーブルの上にオレンジジュースが2つしかないのを見て、「私のがない。」と、言った。

一気に、ぼくらの日常は戻ってきた。
あまりにぼくらの知っている日常なので、最初はそれに呆れたりもしたが、ぼくらは気持ち良く、他愛もない話を再びし続けた。
彼女は少しも変わらなかった。
あの笑顔も、ぼくをワクワクさせるような言動も、まるでぼくの知っている彼女だった。
それは、「森くん」というコイビトが、元から存在しなかったかのような、もしくは「森くん」と何事もなく、うまく行っているような…、そんなふうに見えた。
変わったのは、どちらかと言えばちえちゃんだった。「あまりになんでもない風でいるのが、かえって痛々しいよ。」と、ちえちゃんは言った。
ちえちゃんが、誰かを大切に思う気持ちをためらわずに、ぼくに見せたのは、おそらくこれが初めてだった。
2週間の間、彼女が自分の部屋で、じっと何かを考えていたのか、それとも雨が降る度に、1人で散歩をしていたのかぼくには解らない。
けれど、いつもと同じように見える日常でも、彼女の中では確実に何かが起き、ぼくに見えないだけで、何かが終わったのだろう。
日常っていうのは、何も変わらない毎日の事ではなく、目まぐるしく変化するぼくらの中で、同じに見える1コマをいうのだろう…ぼ

くらにとっては。
彼女は自分の好きな人との別れを、彼女なりに納得し、受け止めて、砕けてしまった彼女自身をもう1度組み立て直して「森くん」のいない日常に解き放ったのだろう。
彼女はそれを見事にやってのけた。
彼女はそうやって、誰にも見えない所で、何度も苦しんで、何度も立ち直ってきたのだろうか。そして、辛い事など何も知らない小さな女の子のように笑っているのだろうか。
ぼくは、夏祭りの夜、理由は忘れてしまったけれど、そこにいた人達が爆笑した時に彼女が言った事を思い出した。
「それぞれ皆、良い事ばっかりで生きてきた人なんていないし、必ず何か心を痛くする事があったはずなのに、今こうして、時を同じくして、同じように笑ってるのって、すごいよね。」
その時は、ぼくも大笑いしていて、なんとも思わなかったけれど、今になって、笑っている彼女を見て、本当にそうだな…と思った。

9月4日

例えば、2匹の捨て犬が雨の中で震えながら体を寄せ合っていたとする。
ぼくは創造力の限りを尽くして、それを思い浮かべてみる。
仔犬は雨に濡れた毛を、ぺしゃんこに体につけて、小さくカタカタと震えているかもしれない。
きっと、お腹も空いているに違いない。
ただ1つの救いは、互いの体の触れ合った部分から伝わる、かすかな温もりだろう。
いや、こんな状況では、そのかすかな温もりは、熱い程に感じるかもしれない。
淋しいとか、悲しいとか、ひもじいとかいう感覚も麻痺させる程、極まった状況で、その相手の体温はどれほど心を温かくするだろう。
自分の体温が、相手を、ほんの少しでも温めているという事は、どれほど心を強くするだろう。
…そんな風に、冷たい雨の中にいる、段ボールの中の小さな仔犬の気持ちを思ってみる。
たった1つの救いで、全てに負けないでいられる。
そうして、互いが互いをやっと守って生きていたある日、通りかかった少女が段ボールから1匹の仔犬を抱き上げる。冷たくなった体を温めてやろうとする。
最初、仔犬は抵抗するかもしれない。
2匹のささやかな温もりを取り上げられて鳴くかもしれない。
けれど少女は仔犬を余計に可哀想に想って抱きしめる。
今まで感じた事のない、全身を包む温もりに、仔犬は次第に温められて、その幸福に身を委ねる。
たまに、段ボールに残された、もう1匹のことを想う事があるかもしれない。

でも仔犬は、自分が充分に相手を温めてあげられない事を知っている。
誰かが段ボールの側を通りかかって、たった1匹で震えている仔犬を抱き上げてくれる事を祈る事しか出来ない。

一方、残された1匹は、抱き上げられた仔犬を想って、最初は鳴くかもしれない。
もしかしたら、ほんの少し、恨んだかもしれない。
でも、次第に、抱き上げられた、その仔犬の幸運を喜んでやるべきなのだと考えるようになる。
この仔犬も、自分が充分に相手を温めてあげられない事を知っているのだ。

「なんかさ、2階の窓から宙返りして、見事な着地がしたくなるような晴れだねぇ。」
彼女が窓から身を乗り出して言うのを、ちえちゃんが笑いながら言い返した。
「どんな晴れよ、それ。ずいぶん危ない晴れ方じゃない。」
「ちがーう。そうじゃないよ。解んないかなぁ。」

残された仔犬は、誰かが段ボールの側を通るのを待つのだろうか。
それとも、1人で段ボールを這い出て、歩き出すのだろうか。

「ねえねえ、宙返り日和な晴れって、あるよね。」
彼女は、思わず言ってしまった言葉を、なんとか解説しようと、ぼくに助けを求めてきた。
「なんだよ。それ。」
ぼくは笑った。
「やけくそな晴れ？」
ちえちゃんも笑いながら言った。

彼女も、もうどうしようもなくなって、自分でも笑い出した。
「もー！気持ちよさそうに聞こえないかな？」

ぼくは窓から空を見た。
そういえば、彼女と出逢ってから、空を見る事が多くなった。
空は、眩しいくらいに晴れていた。その空こそが、「宙返り日和な晴れ」なのだ。

9月11日

「大切なものが、目の前にあるのに、わざと違うものを見ちゃう時ってない？」
ちえちゃんが、氷の入ったオレンジジュースをじっと見て言った。
「私は、あるな。目移りとか、そんなんじゃなくて。ドキドキしながら違うものを見てるの。ちゃんと見なくてもこんなにドキドキするのに、それを直に見たらどうなっちゃうんだろって、それが、すごく恐くて、まるで気のないふりをしながら、違うものを見てる時がある。」

ぼくは彼女を見た。
彼女は窓から外を眺めていた。
ちえちゃんの話について考えているのか、全く別の何かを考えているのか、その顔から読み取る事は出来なかった。
「それって恋愛の話？」
ぼくは、ちえちゃんの話に少し遅れて反応した。
「それだけじゃない。人生全般について。」
「ふーん。」
ぼくは机に頬杖をついて、また彼女を見た。
ちえちゃんは最近変わってきている。どこがとうとは、うまく言えないけれど、例えば今みたいに自分の考えを人に話す事は今まではあまりなかった。
彼女は野生動物のように敏感に、ちえちゃんの変化を感じ取っているようだけれど、まるで以前からそうであったような、自然な反応をしていた。
ぼくは彼女ほど敏感ではないので、なんとなく変わってきているとは思うけれど、たいして違和感は感じなかった。ただ、せっかくだから、ちえちゃんが、大切なものをちゃんと見れるようになれば良

いと願った。その方が、きっといい、と思った。

「私が小さい時住んでた家の周りってね、竹の林だったの。」
彼女が突然言った。
「うん？」
「今年は七夕しなかったなぁ…と思って。」
「去年はしたの。」ちえちゃんが聞いた。
「もうずっとしてない。」彼女は笑った。「小さい時ってなんであんなに沢山行事があったんだろうね。」
なかなか良い問題提起だった。ぼくらはしばらく真剣に、そのことについて悩んだ。
しかし、夕方になっても納得出来る解答は得られなかった。
彼女がブランコに乗りたくなったと言ったのを良いきっかけに、ぼくらは公園に行った。

この公園で、子供の姿を見た事がない。
その日も、公園には誰もいなかった。
彼女がブランコを漕ぐのを見ながら、ちえちゃんが言った。
「あのこは、普通、人が大人になる時に少しずつ心の周りに張り巡らす、バリアみたいなもの、何も持ってないんだよ。だから、心が丸裸で、直にいろんな出来事が心に触れるの。」
彼女のブランコは、かなり高い所まで上がっている。
「辛い時に、辛いって顔してくれれば、もっと楽なのにね。」
ぼくは、ちえちゃんを見た。
「辛い事があっても、すぐに笑って現れるから、どうしていいか解んないよ。」
ちえちゃんは、じっと、ブランコに乗る彼女を見ていた。
急にブランコが止まって、彼女がヨロヨロして歩いてきた。
「…気持ち悪い。」
「酔うまで乗らないでよ。子供じゃないんだから。」

ちえちゃんとぼくは、ベンチに座る彼女を置いて、笑いながらブランコに乗った。
ブランコの勢いで、どちらが遠くまで跳べるか競争した。
陽が、少し短くなってきていた。

9月15日

「人の毛ってさ、まゆげはこれ以上伸びないし、腕の毛も同じ長さまで伸びると、そこで止まるじゃない。体があっちこっちの毛の長さを記憶してるのかなぁ。髪の毛も長さが決まってて、そこまで伸びたら止まっちゃうのかなぁ。」

彼女の問題提起はくだらないけど鋭い。鋭くて、なかなか難しい。

この日も、ぼくらは氷の入ったオレンジジュースを1杯飲みきるだけの時間を費やして、その問題についてのおしゃべりをしたけれど、結局、ぼくらには解らないということが解っただけだった。

「じゃあ、私が調べよう。」

そう宣言して、ちえちゃんは図書館へ行った。

ちえちゃんがいなくなると、彼女の疑問はぼく1人にぶつけられることになった。

朝顔のツルの巻方は南半球に行くと逆になるか？とか、そういう子供電話相談室に電話したくなるような疑問が次から次へと出た。1つ不思議に思ったら、イモヅル式に出てきたといった感じだった。

暗くなる頃には、ぼくも彼女自身も相当くたびれて、ぼくらは表へ出た。

彼女と2人で街を歩くのは、あの雨の日以来だった。

2人だということを意識した途端、ぼくは急におしゃべりになってしまった。

なんだか、そんな自分をみっともないと思いながらも沈黙に耐えられるだけの自信がなかった。

収集がつかなくなって、ぼくはちえちゃんの事を話題にした。

「最近、変わったと思わない。」

「あのさ、時間のスピードと変わるスピードが同じ位の時は目立たないだけで、いつも変わってるんだと思うよ。みんな。時間のスピ

ードに追い付いてなかったら、それも逆に目立つんじゃないかな。」
「じゃ、今は時間の流れる早さより、変わる早さの方が早いって事？」
「少しね。」
「ふーん。」
ぼくは例によって素直に感心した。でも、彼女は、突っ込むちえちゃんがいないので、自分で言った。
「…って、思いたいの。自分は常に変化してるって。」
「日々、成長か。」
「んーん。成長って限んなくて、自分が満足出来る方向にの変化ならいいの。」

ぼくらはまた、街を随分歩いた。
公園の入口まで来た時、ぼくはまた間が持たなくなって、しゃべりだした。
「1個、聞いていい。」
「ん？」
「以前にさ、良いことばっかりで生きてきた人なんていないって、言ってたことあったじゃない。」
彼女はジャングルジムをぐるりと周りながら聞いていた。
「辛いこととか、悲しいこととかあって、どうしてそんな風に笑えるの。」
彼女は立ち止まって、ぼくの方を見た。
ぼくをじっと見ていた。
美しいものも、醜いものも、まだ何も知らないような…、もしくは逆に全てをもう、許してしまったような、真直ぐな瞳だった。
ぼくがその瞳に耐えられなくなって、瞳をそらそうかと思った時、やっと彼女は口を開いた。
「私にも、辛いことや悲しいことが無い訳じゃないよ。でもね、辛いことや苦しいこと位で、小さくなったり薄れたりするような、そ

んな弱っちい幸せじゃないの。私のは。私は、幸せだから笑ってるの。」
彼女は笑顔でそう言い切った。
ぼくは、しばらく口がきけなかった。
「…もっと、鍛えなきゃな。オレも。」
「がんばりなね。」
月明かりの公園で、少しうつむいて、そう言った彼女は、何故かハカナゲで、今にも消えてしまいそうに見えた。
真っ白い肌が、夏の終わりの、この熱気の中に、あまりにもタヨリナゲだった。普段はそんなことを感じたことはなかったのに。
一瞬、ぼくは彼女が竹に似ていると思った。
それは、彼女が竹林の側で育ったからかどうかは解らない。
ただ、大木のような存在感もなく、小枝のように弱くもない。
たった1本、すっくと真直ぐ空を目指し、風にあおられても一大木が倒れるような大風も、しなやかに受け止め、ものともせずに、ひたすら真直ぐ伸びてゆく。
その強さが、彼女の中にも流れていると思った。
同時に、この世のものではない何かを、ぼくは彼女に感じた。
彼女が今ここに、こうしているのが、ひどく不確かなような気がしてならなかった。
ぼくは彼女に、何かこう、偉大なエネルギーみたいなものを見た気がしたのだ。
うまく言えないけど、女の子といるのに、その瞬間ぼくは彼女を抱きしめたいというような気持ちが、ほんの少しもなく、そう、手を合わせたいような衝動に駆られていたのだ。
彼女のどこに、そんなエネルギーがあったのか解らない。
敢えていうなら、そこには女神が居たとしか言い様のない感じだった。
「どうしたの。」
戸惑っているぼくに、彼女はいつも通りの、悪戯ッ子のような瞳で

尋ねた。
ぼくは一気に現実に引き戻された。
「ん？おまえさぁ、人間じゃないみたい。」
「なにそれ。バケモノって意味？」
笑って言う彼女を見て、ぼくは少しホッとした。
「でも、こないだ、別の子にも似たようなこと言われたよ。本当は人間に生まれてくるはずじゃなかったんじゃない？って。なんかの手違いだって言われちゃったよ。」
ケラケラ笑って彼女は言った。

彼女は気付いていないけど、彼女はいつも、危うい感じを持っているんだ。
つかみ所がないというか。その存在事体に確信が持てないというか。夢なのか、現実なのか、解らない感じだ。
このまま、ぼくの目の前で、月に昇天して行っても、何も不思議じゃない気がするんだ。
ぼくは、そんな彼女の事が好きだということが、とても素晴しいことだという、喜ばしい気持ちと、神への畏れにも似た気持ちが入り混じって、とても複雑だった。
そして、この時ぼくは、彼女の事を好きだと思った自分自身を、とても自然に受け入れていた。

謎。

ぼくらの日常は、相変わらず続いていた。
ちえちゃんの変化とか、ぼくの変化、ぼくには解らないけれど、彼女の変化。そんな小さな変化や、ゆっくりと、でも確実に変わっている季節の変化やなんかを飲み込んで。

他愛もない話も続いていた。
でも、ぼくらはもう、氷の入ったオレンジジュースを飲まなかった。
誰かが言い出した訳ではなくて、ただ、なんとなく。
ぼくらにはもう、氷の入ったオレンジジュースは要らなかった。
「あ、あれ、きっと今年最後の入道雲だよ。」
彼女が窓から外を見て言った。
「どうして、あれが最後って解るのよ。」
ちえちゃんは、そう言って笑ったけれど、ぼくらは3人、窓の所に座って、その入道雲を見た。
今年最後の入道雲か。
夏は、終わろうとしているのかもしれない。

「謎。」
一全くの謎だった。彼女はその夜、睡眠薬を1瓶のんだ。

最初、誰もが一瞬、彼女の失恋の事を考えた。
しかし、それは彼女自身の手によって、すぐに否定された。
彼女の日記。彼女の日記を、ぼくらは彼女の眠る隣で読んだ。
それは、彼女らしいといえば全く彼女らしい、こんな状況で読んだのでなければ思わず笑ってしまうような日記だった。
その日に何があったか等という事は、ほとんど記されていない。
彼女の、その時々の気持ちが、ある時はたった一言。ある時は長々

と書いてあった。
日記を読む限り、彼女の人生は幸福そうだった。
もしかすると、幸せであろうと努力する人だったのかもしれないと、ぼくはふと思ったりした。
そして、失恋から2週間程過ぎた、ある日の日記。
—”「死にたい。」って思ったのは生まれて初めてだ。早く死なないかなぁ…なんて思って生きてるのって、なんか…。でも、今の時期に私がそうゆうこと言うと、きっとみんな森くんと別れたからとか、そーゆーふーにとるんだろうな。つまんない。”
確かにそうだった。「森くん」との別れは、彼女にとって死ぬ程辛い事だったかもしれないけど、死ぬ程辛い事ぐらいで彼女は死んだりしない。
”辛い事や悲しい事がないわけじゃないよ。でも、辛い事や悲しい事ぐらいで、小さくなったり薄れたりするような弱っちい幸せじゃないの。私のは。”
夏の終わり、彼女が言った言葉をぼくは思い出していた。
—じゃあ、彼女は幸福の中で死を選んだのだろうか。

「彼女が、」ちえちゃんが力ない声で力強く言った。「彼女がもし、”まだまだ生きたい”って、”生きていたい”って思いながら死んだなら、私、悲しむし、泣いたりもするだろうけど、彼女が自分自身で選んで決めた事だから、私は何も言わない。」
彼女は、インディアン＝スノーが空まで積ったあの日、神様が仕掛けた秘密だったのかもしれない。
そんな事を考えながら、傾き始めた、柔らかい陽射しがいっぱいに射込む病室を出た。
「純粋、過ぎたんだと思うよ。」
ちえちゃんが、ポツリと言った。
ぼくは、黙って歩き続けた。
「現代の、この社会に生きてゆくには、あんまりにもキレイ過ぎた

んだと思う。悪い世の中って訳じゃないけど、いい世の中とも言えないじゃない。普通の人にとっては自分で処理してしまえる程の毒が、彼女には絶えられない程だったんだと思う。」
病院のベットに横たわった彼女の顔は、苦痛に歪むでもなく、つらそうでもなく、多少むくんでいる以外はいつもと変わらない－いや、むしろ幸せそうだった。
彼女は誰にも妨げられない眠りの中に居た。
涙が、頬を伝っていくのを、ぼくは感じた。
彼女は夢から帰って来ない。
「だってさ、人間は、この”球”でしか生きていけないけど、”球”の内側じゃなくって、外側でホントによかったねって、空を見て、本気で言う子だもん。」
ぼくらは立ち止まって空を見た。
彼女が見た空は、今日みたいな空だったんだろうか？
－いや、彼女ならきっと、晴れてても、曇っててても、雨でも、どんな空でも「いい。」って言うだろう。
昼も夜も、夏も冬も、「やっぱ、これが最高かもね。」って、楽しそうに笑うんだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1570b/

インディアン＝スノー＝デイ

2010年10月10日21時56分発行